



松戸市教育委員会

教育長 伊藤 純一

「未来を創るために」 —教育はみんなで—

約3年間続いた新型コロナウイルスの影響がようやく静かになり、令和の元号下で初めて落ち着いた時期を迎えられていると感じています。しかしながら、皮肉にも、漠然と感じていた世の中の混沌さが、実感を伴って身に迫ってきています。

そしてまた、世界中の情報が瞬時に入ってしまう高度情報化社会においては、世界の状況と比しての日本の危機的な状況も明確になり、私共の所管する教育・文化においても、立ちはだかつて多くの課題に対応せざるを得ない状況となっています。

諸課題のベースには「グローバル化」や「多様化」等多くのキーワードが横たわっています。私たちは、その一つ一つを自分ごととして捉えなければなりません。例えば「利他」という仏教用語があります。深い言葉ですが、現在の学習指導要領が発信している「主体的・対話的で深い学び」の「主体的」というキーワードにも、この「利他」は大きく関わります。「主体的」を考えるためには、「自分」を考え、知る必要があります。そして同時に「他」を理解する必要があります。

けれども、ここのところの日本社会では「他」を意識することの幼さを強く感じます。多くの人たちが同じ方向に流れている最近の日本社会に、このことはさほど必要が無かったのかもしれませんが。

令和5年4月末の段階で松戸市には、外国人が18,000人以上住んでいます。首都圏の周縁部に位置する本市には、その生活環境の便利さと労働環境から、多くの外国からの方が住んでいるということです。近年、出入国管理事務所が設置されたことも含めて、この傾向は続くと思われま

す。その出身国数が107カ国となっているということは、それだけ多くの国の文化がこの1つの自治体に存在しているということです。そして、彼ら自身は日本という異なる文化の中で、自身を保ちながら、自身の明日を創ることに努力されていると理解します。

松戸市国際交流協会が行っている日本語教室では多くの方々が進んで学んでいます。民間の日本語学校で学んでいる方もいます。小中学校では多くの児童生徒が日本語指導を受けながら、日々の学習活動に努力しています。

このことを私たちは理解しなければなりません。そうすることが明日の松戸市を創ることにつながります。多くの異なる文化を背負った人たちが行き交う「グローバル化」の中で、そして、様々な生き方を求める「多様化」の中で、「他」を理解し、受け入れることの重要性は増しています。自分を知らず、他を知らずして、新しい社会を構築できるわけがありません。自分たちの近未来しか考えない社会は立ちゆきません。

松戸市教育委員会は、未来の社会を創るために「教育」という仕事をしていると自負しています。そのために、文化の急速な進展、それらによる複雑な変化等による更なる変化に、たじろがず、積極果敢に立ち向かっていきます。組織改編も2年目に入りますが、更なる進化を加えて、令和5年度も「学びの松戸モデル for 2030」の具現化に努力します。もちろん外国からの方も加わった「教育はみんなで」の考え方はますます重要になります。

市民の皆様のご理解・御協力をお願いします。